

## 編集室から

自分の講演・研修で「日本人全員と名刺交換するのに、どれくらいの日数が必要か」と問いかけるときがあります。

答えは、一日十人だと約三万年。一生を百年だとして、この内に完了したい場合は、日に約三千人を毎日百年間、一日も休み無く繰り返す必要がある、ということになります。

この例を以って、持続するビジネス（飽きない商い）に欠かせない「ご縁・有難い」の深意を解説しています。ところが、なんとこの喩え話を真摯に実行している聖者に出逢いました！

詳しくは「つぶやき」欄をご参照ください。

心の時代といわれて久しいですが、2011年よりわが国の死因の第5位に精神・神経疾患が入ったと聞きました。つまり、状況は益々厳しさを増しているといえるかも知れません。

先日、医療費負担について「食いたいただけ食べて、飲みたいだけ飲んで、糖尿病になって病院に入っているやつの医療費はおれたちが払っている。公平ではない。無性に腹が立つ」と、政府首脳の発言が淡々と報道されました。

かつて成人病と呼ばれていた病は生活習慣病と呼ばれています。今や小学生にも広がる病ですが、これが自己責任病と改称される日も遠くないかも知れません。（糖尿病は死因第4位）

そして、このような流れが定着すると、健康保険は公的制度から国民一人ひとりの自己責任に委ねられる米国式になるのかも知れません。

そうなると、心の時代の様々な病は、すべて自己責任で対応すべき時代となるともいえませぬ。政治に国民への思いやりを期待する方が無理なのかも知れません。

こんな時代で、地域住民の幸せを実現するための地域計画・ビジョンは如何にあるべきか？が、本業で深く悩んでいる点です。その解決策を探索する長い旅になっています。（は）



Chintara

本ニュースにレギュラー執筆  
していただいている川島さん  
が「能登の夜市」の姉妹店を  
開店されました。

上京された際、ご利用になっ  
てみてください。

もちろん、川島さんご自身も  
お店に立っておられます。

日本酒バルChintara

03-6427-8183

17:00～24:00

金曜17:00～28:00日曜祝休

渋谷区道玄坂2-19-3ライオンズマン  
ション道玄坂1階

このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。

2013/06

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167

石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217

Fax 076-233-7375

Email [usric@neting.or.jp](mailto:usric@neting.or.jp)

2013/06

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

## 水意月



岩手県二戸市浄法寺にて  
by hama

## 寄稿 『仕事は特技で身を助ける』

企業教育・ビジネス絵手紙講師、作家 川口 整

ビジネスパーソンにキャリアや立場は関係ありません！今日のビジネス実績は、強み（個性・特技）を伸ばし、誰と協働するのか、一期一会・出会いの大切さを実感することです。

ビジネスパーソンは常日頃から次のような問題を抱えています。

部下との関係をもっとよくし、マネジメント力の向上を模索

同僚や・上司やお客様に、自己PRをもっとうまくやりたい、業績を上げたい

自分自身を磨き成長させたい、人間力を向上させたい

情熱を持って、自己の夢を実現させるプロセス力を強くしたい

愛情を持って、家庭内やコミュニケーションのコミュニケーションの悩みを無くしたい

相手を嫌な思いにしたところで、徳は得られませんが、組織変革の実践指導を専門とし、部門に係なくエグゼクティブ・中堅・若手を対象に、一貫した手作りのマネジメント・プログラムで二、三年、千社以上支援し続けてきた私自身、本当に社会にとって必要な存在（リーダーシップ発揮）であるかと、今でも自問自答しています。

仕事に手を抜けば、自分の心が痛みますが、その痛みで自分自身で気付くまでにお客様・上司部下

は、何も言ってくれません。

ビジネスパーソンは、感受性・柔軟性・創造性と、リスクに立ち向かうなどの能力というふたつの異なる資質の向上とバランスの日々研鑽なのです。

このような感性を磨くために提唱し始めた「ハイブリッド絵手紙ビジネス（HEB）」は、品格のあるビジネスパーソンの人間力向上に励み、相手との交流を奥深く盛んにします。

心の時代といわれていますが、デジタルはなくなりません。宮本武蔵の如き、デジタルとアナログの二刀流の仕事ぶりを磨き、特技とする時代です。HEBは、ビジネス・コミュニケーションを助力し、真心を可視化する強力なツールです。自筆でしたためるビジネス絵手紙は、先方に「言葉と字と画」で自分が深く感じ、心を動かされた意を伝えます。

感動を伝えるのに、文才、書才、画才は必要ありません。稚拙でも構わない、あなたの真心があれば相手に伝わります。真心はありのままのあなたの「美」です。今のありのままの自分（個性）を伝えるのがHEBなのです。是非、お試しください。

セミナー案内：<http://www.seminars.jp/s/84134>



【プロフィール】（かわぐち せい）  
J M A M パートナー講師、日本絵手紙協会会員、産業・心理学会会員、産業力ウンセリング学会会員。専門は企業変革。「未来に継ぐ」心富める者は、後代に名を留める」を掲げ、企業興隆つくりの研修・講演を全国で実施中。

## 濱のつばやき 『慈』

友人に誘われるままインドの聖人の来日プログラムに参加した。その聖人は愛称でアンマと呼ばれている今年六十歳になる女性である。

彼女は、貧しい家庭に生まれ、幼い兄弟の世話をするためにほとんど学校にも行っていない。あるとき、ふとしたことから、自分よりも厳しい境遇の人を思わず抱きしめた処、次々と抱きしめて欲しいという人が現れ、寝食を忘れて次々と抱きしめ続けたそうだ。今日では「抱きしめる聖者」と言われている。

ダルシャンと呼ばれる抱擁を受けるために、東京流通センターは大勢の人々で埋め尽くされていた。僧侶や牧師の衣装のまま並んでいる人も居て、特定の宗教を越えていることを物語っていた。その中の一人となって、順番を待つ。やがて自分の番になった。「その時」は、他の人よりもかなり長いのではないかと感じられた。そして耳元で三度同じ言葉が繰り返された。

アンマは、日本語を話せないという。が、その言葉は、確かな日本語に聞こえた。そして、優しくしかし、的確に自分の状況を突かれたような衝撃を感じた。

その時、既にある決断をしていたつもりだった。それにも関わらず、深い部分では迷っていることに、気付かされた。自分のひ弱さ・愚かさを正面から見ざるを得なかった。

アンマがあの時、自分にささやいてくれた言葉は、「いい息子よ」という意味であったことは数日後、問わずして耳に入った。が、そんなことは、どうでも良かった。アンマは、国連で数々の講演を依頼され、また国際的な受賞歴もあり、世界的な聖者として知られている。東日本大震災後、みやぎこども育英基金に百万ドルの寄付もされている。

東京では午前と午後二回行われたが、この日の最後のダルシャンは、夜から翌未明まで続いた。その間、彼女は一滴の水も飲まず、一瞬も休まなかった。そして最後まで全く集中が切れず、豊かな表情で一人ひとりに向き合っていた。幼子の純真さそのまま。

これでも、日本でのプログラムは楽な方だという。海外では数万人が押し寄せ、二十四時間休み無く続くことも少なく無いという。

彼女は、既に四十数年間、三千万人を優に越える人々をダルシャンし続けている。これが奇跡でなくてなんとと言えばよいのか。彼女の周りには多くのボランティアが集まり、この無償プログラムが円滑・的確に進められるよう、努力が払われていた。世界中で、同様の光景が見られるという。

空が完全に明るくなった頃、行列に並ぶ人が無くなり、ダルシャンは終わった。彼女たち一行は、満面の笑みを湛えたまま数時間の後、米国へと旅立っていった。

アンマとは、「母」という意味である。



きただより58 弘前大学地域社会研究会 上村 康之  
『「テレビ東京・路線バス旅番組」にみるバス事情』

テレビ東京は、旅番組や地域を深く紹介するような番組を得意としている。その番組の一つに「ローカル路線バス乗り継ぎ人情ふれあい旅」がある。番組は2007年10月20日の「横浜駅西口～富山湾（氷見）」からはじまり、最新作2013年5月4日放送の「名古屋～能登半島禄剛崎」まで、年に2、3回、土曜日のゴールデンタイムの特別番組としてこれまで14回が放送されている<sup>1)</sup>。第12～14回放送の視聴率は12、13%台であり、テレビ東京の人気番組となっている。番組の人気要因は、3泊4日で路線バスをみの移動で目的地までたどり着けるかというゲーム性と様々なハプニング、レギュラー出演の太川陽介と蛭子能収の絶妙のコンビとゲストの女性タレントの掛け合いなどであろう。

筆者も好んでこの番組を視聴しているが、路線バスをめぐる諸状況や各地の交通事情がわかり興味深い。よい意味での驚きは、まだ路線バスが繋がっていて、なんとかたどりつけるという点である。「函館駅～宗谷岬」「松島～竜飛岬」「青森港～新潟市万代橋」などバスで完結するとは思わなかった。

しかし、全体としては、路線バスの縮小、撤退が番組を通してよくわかる。鉄道沿線ほど主要道路からは路線バスが撤退し、「昨年まで路線があった」「運行区間が短縮されて今はそこに行けない」という場所がよく出てくる。また時刻表がはがれ落ちているバス停を見ると、必要とする人がいないのか寂しい気持ちになる。

民営バスの路線廃止後は、自治体がコミュニティバスを運行し受け継いでいる例が多い。地方圏の例では「日光～松島」の放送にて、栃木県那須塩原地域バス、那須町民バス、福島県本宮市街地巡回バス、二本松市広域生活バスなど、都市圏の狭間の人口の少ない地域を埋めて繋いでいる。大都市圏の例では「新宿駅西口～新潟駅万代橋」の放送にて、東京都内から埼玉県中央部には関東バス、国際興業バスなど大手民営バスが路線網を拡げているが、JR高崎線沿線となると鴻巣市コミュニティバス、深谷市コミュニティバスが路線を繋いでいた。

しかし、コミュニティバスは自治体内のみの運行である。民営バス運行時には、路線があった隣接市町村と繋がっていない。また、運行本数も1日1～3本と極端に少なく、高齢者の生活路線に重点が置かれ日中のみの運行、夕方以降は運転なしというところが多い。

出演者が、バス営業所や運転士にバス路線やダイヤについて訊く。皆この路線バスのみの旅という難題に対して親切に調べてくれるが、自社でも他営業所の路線になるとあやふやな答えになる。他社になると、同じ駅前から発着するのにほとんど明快な答えはない。ここにバス会社のサービスや情報という問題も孕んでいる。

さて、路線バスをめぐる諸環境が厳しくなる一方で、この番組は貴重な映像であるともいえよう。路線バスを使った旅がもっとブレイクして、少しでも路線の維持に繋がって欲しいと願うものである。

1) テレビ東京のため、ほとんどの地方では、全く異なる月日、時間帯で放送されている。

『なくて七癖あって四十八癖』  
株式会社GARBAGE代表 川島 嘉浩

最近物忘れというかど忘れが多い自分に辟易しているのですが、そういえば小学生のころから『忘れ物』が非常に多い子供でした。

小学生時代はランドセルをよく公園やグラウンドに置いてきてその後母親が探しに行くのは日常でした。特に記憶にあるのは鼓笛隊のイベントに縦笛を家に忘れてしまい、私だけ「エア縦笛」で参加したことです。エア系のはしりと自負しております。中学生のころには野球部の遠征先の宿舎に学生服を忘れて翌日私服で登校し先輩に目をつけられたり。高校生時代は先生に見つかったら確実に謹慎、へたすると退学にもという代物(口から煙がでるやつです)をちょくちょく部室や教室に忘れる始末。大学生となるとお酒が入るからひどいもので財布、上着は当たり前でした。まだ携帯電話もなかった時代であったことが幸いでしょうか。とまあ「忘れる事」にまつわるエピソードに関しては枚挙にいとまがありません。

ところがこの忘れ物王が社会人になったとたんに忘れ物をしなくなりました。その理由は3つで

- ・クライアントの情報管理が重要な会社にしたため、機密情報を紛失した日には即解雇かつ賠償問題にもなりかねなかった
  - ・ビジネス手帳、パソコンといったツールを使い始めたため記憶ではなく記録に依存するようになった
  - ・自分は忘れ物が多いという事に関する自己認識と変わらなければという意識改革
- です。

『忘れ物』は私にとって"癖"のようなものだったのですが、それも危機意識、補完するツール、心構えの3つの要素で払拭できたのでしょうか。かつその過程で

「常にメモや記録をとる」

「自分の能力を過信しない」

という新しい癖づけができました。

人はなくて七癖あって四十八癖といえます。中々自身では自分の癖を認知し変えていくことは難しいのですが、いいと思った事を習慣化するという癖づけをしていけば四十八くらいはつくれそうかな。次なおしたい癖は「酒癖」ですかね。しかし商売が商売なのでハードル高そうです。

## 『富士の国から ~大魔神のたび~』

~ 英国の旅 ~ 静岡県職員 溝口 久

長女が昨年9月からロンドンにあるウエストミンスター大学に留学している。そこで4月28日から5月5日まで家族でイギリスに出かけることにした。GWの成田空港の混雑は相当であろうから、中部国際空港セントレアから北京経由でロンドンヒースロー空港に入ることにした。

9:20発の国際便だから2時間前にセントレア到着としなければならない。早朝我が家を出て間に合わないこともないが、過去3回飛行機に乗り遅れ痛い目に遭っているの、大事を取って前泊することにした。空港前のビジネスホテルをネットで調べるとなんとネット予約の泊り客には10日間駐車料金がタダとあるではないか！さらに家族3人の宿泊料金も皆で1万円程度だ。これはいいと早速予約を入れた。富士山静岡空港からトランジットしてロンドン入りの可能性を当初考えたが、残念ながら効率のいい日程を組むことができなかった。

7:20にチャイナエアラインの窓口に着いてみると待っている人は数人で、イーチケットとパスポートを出し、早くスムーズに搭乗券を受け取ることができた。北京までは比較的空いていて、席の間隔にもゆとりがあった。ところが、2時間の乗り継ぎ時間を経て乗ったロンドン行の飛行機には、前座席の背面に付いているビデオモニターが席の間隔を狭くし、しかもほぼ満席で9時間を超す長旅はかなり堪える。隣を見ると小生よりも大きな体躯の持ち主が身をすぼめて乗っているのだから、まだましと気持ちを収めた。

セントレアを出たのが9:20ヒースロー空港に着いたのが同日17:45(日本時間23:45)、8時間の時差があるので得した気分はある。空港から出たらそこには長女が待っていた。予定とおりだ。北京



空港からフリーのWi-Fi使ってスマホから予定通りの飛行であることのメールはしておいた。

空港からホテル「シェラトンパークレーン」へはチューブ(ロンドンの地下鉄の愛称)に乗って行った。切符はスイカのロンドン版であるオイスターを家族分用意してくれていた。このカードは現金で買うよりも割安料金が適用され、自動的に一番安い料金が選択される。例えば、ロンドンの地下鉄のゾーン1の切符を現金で買うと4.5ポンドだが、オイスター・カードだと2.1ポンドとなる。料金設定はゾーン分け以外にも、ピークとオフといった時間帯でも違いがあり、かなり細かく分かれているとのこと。カードの名前は同じく食べ物か、こちらの由来は牡蠣殻の頑丈さからのイメージとして『セキュリティ』の意味を、そして真珠貝(パールオイスター)のイメージから『価値』を表わしている。

地上を走ることも多い地下鉄から英国の風景を眺めながら、グリーンパーク駅で降りた。ホテルは日本大使館のすぐそばにあった。飛行機内ですでに三度の食事を済まし、日本時間の午前様に入っている時間帯に豊富な食欲があるわけでもなく、チェックイン後に外でサラダ、パン、スープを仕入れてきて遅い夜食となった。

今回、ロンドン3泊、郊外に出てオックスフォード、コッツウォールズにある英国で最も美しい村と言われるバイブリー、最後はローマ時代に温泉の町として栄えたバースに各1泊ずつ計6泊することになっていた。いずれもデラックスクラスのトラディショナルホテルだ。(つづく)

